そよかぜ
毎日新聞西部社会事業団だより

第65号　2005年９月

発行所　〒802－8651
北九州市小倉北区紺屋町13-1
(財)毎日新聞西部社会事業団
発行人　田上　猛
電話 093-551-6675 ファクス 093-541-8009
E-mail s-maiswf@cotton.ocn.ne.jp
郵便振替　01770-2-40213

「歩みの会」(宇佐市)に毎日社会福祉顕彰

心身障がい者らの活動支えて31年

社会福祉の発展向上に貢献した個人や団体に贈る２００５年度の第35回「毎日社会福祉顕彰」(毎日新聞社会事業団主催・厚労省、全国社会福祉協議会後援)に大分県宇佐市に本拠を置く「歩みの会」(代表・寄村仁子=とよこ=さん)が選ばれた。心身障がい者のデイケア施設や共同作業所などを運営しており、会の設立から３１年目の快挙となる。

毎日社会福祉顕彰は、毎日新聞社会事業団の創立６０周年を記念して１９７１(昭和46)年に設定。これまでに全国から個人８４人と２３団体が受賞しており、西部社会事業団管内からは、ユニークなホームレス支援活動で昨年受賞した奥田知志さん(北九州市)に続き２年連続、１６件目の受賞となる。

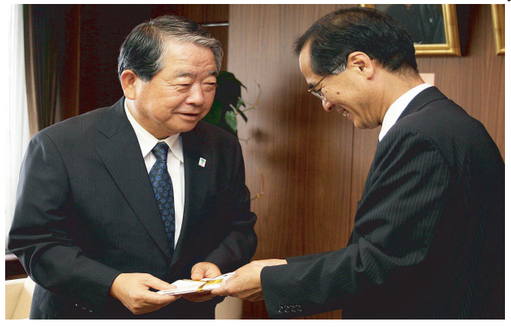
「歩みの会」は、代表の寄村さんが「真の障がい児教育とそのあり方」を求めて１９７４年９月、大分県中津児童相談所に勤務していたころに知り合った障がい児の母親ら親子１０組と１４人のボランティアで宇佐市に設立。まずプレハブ建ての障がい児保育施設「みんなの家」を建設。ここを拠点に、徐々に活動の範囲を拡大。共同作業所や生活学校、ケア・ホーム、生活支援センター、企業組合などを次々と設立。これらの施設を宇佐市内だけでなく、大分市や中津市、更に隣県・福岡県豊前市にも建設するなどして、活動の場を広げ、現実に即した障がい児・者のための生活環境づくりを進めていった。会が発足した当初は、施設に入所させる、いわゆる施設福祉が主流だったが、「歩みの会」の活動は、在宅福祉や地域福祉の考え方をいち早く取り入れ、社会福祉制度のあり方を問い直した。そうした活動はその後のデイサービスの制度化につながるなど、先駆的な役割を果たしたことも、今回の受賞に値する大きな評価点にもなった。

９月16日、東京本社で贈呈式

「歩みの会」とともに、大阪市西成区のあいりん地区で子どもたちの世話を続ける荘保共子さん(58)▽進行性筋ジストロフィーと闘いながら自立への諸活動を精力的に実践する仙台市の山田富也さん(53)の２人も選ばれ、９月16日に毎日新聞東京本社(東京都千代田区)で贈呈式があり、それぞれ賞牌と賞金各１００万円が贈られる。

福岡市などに３８５万円贈る

福岡沖玄界地震救援金の第１次分



福岡沖玄界地震の被災者救援のため、毎日新聞社と毎日新聞社会事業団は、地震発生直後の今年３月24日から募集を始めた被災者救援金のうち、５月末までに集まった3,846,499円を第１次分として福岡市災害対策本部=**写真**、と日本赤十字社福岡県支部に贈った。

救援金の呼び掛けは西部社会事業団をはじめ東京、大阪、中部の各事業団で一斉に始めた。当初は昨年10月の新潟県中越地震、更にスマトラ沖大地震の発生、と国内外で大規模地震が相次いだこともあって“募金疲れ？”の懸念もあったが、受け付けと同時に続々と浄財が寄せられ、事業団のスタッフを勇気付けてくれた。これらの募金は「他人事ではない」といった個人的なものが大半だったが、地域や職場、学校、グループなどが被災者救援のために開いたイベントやコンサートなどで集めた浄財も多かった。

第１次分の内訳は西部133件・2,429,584円▽東京89件・818,129円で福岡市の対策本部へ、大阪37件・571,845円と中部3件26,941円は日赤県支部にそれぞれ贈った。各事業団には、その後も募金が寄せられており、２次以降の配分も続ける。また市災害復旧復興本部によると、義援金は８月現在で約４億５千万円にのぼっているほか県庁や県共同募金会、日赤県支部など県関係にも５億円以上が寄せられており、県・市とも近く、配分委員会を開き、配分額や配分方法などについて協議する。

「ありがとうございました」「子どもたちの笑顔が輝いていました」――西部社会事業団に今、各地から続々と礼状が届いている。例年、夏は恵まれない子どもたちや障がい児・者、その母親らを対象にした、福祉施設や福祉団体が主催する海や山へのキャンプ、合宿研修会、各種競技大会などが各地で開催された。西部社会事業団では、こうした子どもたちに夏休みを少しでも楽しんでもらおうと、多くの方たちから寄せられた浄財を活用して助成しており、その礼状が相次いでいるというわけだ。礼状とともに届く写真には、楽しそうな子どもたちの笑顔がいっぱいあり、事業団スタッフを喜ばせている。

今年４～８月の主な助成事業は次の通り。

①第38回山口県アイリンピック大会(開催日=５月21日、助成額＝２０万円)

②日米精神障がい者交流事業(開催日=６月15～18日、助成額=１０万円)

③田川児童相談所管内ボウリング大会(開催日=６月25日と06年２月４日、助成額=４万円)

④第２８回毎日サマースクール　(開催日=６月28・29日、助成額=１０万円)

⑤第２６回脳性マヒ児のための母親研修キャンプ(開催日=７月16～19日、助成額=１０万円)

⑥第１６回北九州市障害者水泳大会(開催日=７月24日、助成額=５万円)

⑦平成17年度福岡・筑豊地区合同自立体験セミナー(開催日=７月21日～８月26日、助成額=１０万円)

⑧第３０回「歩みの会」ふれあいキャンプ(開催日=７月29～31日、助成額=１０万円)

⑨北九州手をつなぐ育成会第９回わいわいキャンプ　(開催日=７月31日～８月２日、助成額=５万円)

⑩直方市障害児・者第２８回ひまわりキャンプ(開催日=８月６・７日、助成額=１０万円)

⑪30周年記念「わたぼうし音楽祭」(開催日=８月７日、助成額=５万円)

⑫第２９回北九州ＹＭＣＡのびのびキャンプ(開催日=８月13～16日、助成額=３０万円)

⑬第５回ごろりんハウス交流キャンプ(開催日=８月20・21日、助成額=５万円)

福祉キャンプなどに助成

４～８月 各地から礼状続々届く

ともしび

明日への確かな明かりを！

日中の日差しはまだまだ厳しいが、秋はもうそこ、手の届きそうなところにある。あれほど騒々しかったセミの声が街頭から消え、梢をわたる風がほほに心地よい。

「早く発行を…」。そう思いながら、はや半年。やっとこの「そよかぜ65号」が出来上がった。前任の吉田健治さんからバトンを受け取った時はまだ花冷えの季節だった。それがもう、涼気漂う秋の気配である。

生来の面倒くさがり屋。何とか手間を省こうと、よく分かりもしないパソコンを導入したからもう大変。仕事を覚えるだけでも、相当頭を揺すって押し込まねばならないのに、パソコン操作も加わって、固くなった頭はパニックどころか、エンスト状態。遅々として前に進まず、休憩を繰り返しながら、やっとここまで、たどり着いた。

というわけで、事業団だより「そよかぜ」もパソコン仕様に変わった。サイズもＢ５からＡ４へやや大きくなった。

「その分、中身が薄くなった」

「ギクッ！」

……そんな声も聞こえなくはないが「だんだんよくなるほっけの太鼓」と、勝手に慰め、次号以降への期待の声、とすることにした。

さて当事業団の仕事、これまで外部からは眺めていたのとは大違い。戸惑いの連続だ。

まず組織。毎日新聞とは付いているが、全く独立した「財団法人」という名の「公益法人」。民法に基づいて設立され、営利を目的とせず、公益に関する事業をする、の多数の皆さんから寄付をがきまり。つまり不特定預かり、援助・支援を必要とする方たちに助成、配分するわけだ。

寄付も大別すると２種類。地震や水害など災害発生時にお願いする被災者救援金のように救援対象が限定された指定寄付と、恵まれない子どもたちや障がい者、高齢者、ボランティア団体など、幅広い方々へ支援・助成する福祉基金、とある。

傾向としては、前者の限定された寄付の方が圧倒的に多い。寄付する側の意思が明確に現れるわけで、当然といえば当然である。最近のように不況が長引けば、その傾向は一層、顕著になる。

しかし、後者の助成事業も大切だ。むしろ後者の方に支援を待つ人々が多いのではないか、と思う。確かに高齢者や障がい者などには一定の公的援助があるとは言え、その網から漏れた人々も少なくない、と実感する。

初めて、社会福祉に関係する仕事に就いたが、法的な問題から実践的な課題まで、やらねばならないことは多い。が、支援を待つ人々がいる限り例え、ランプのような、小さな「ともしび」でも絶やすことは出来ない。先が読めない暗い時代だからこそ、明日への確かな明かりを灯したい。

(田)